

花の首飾り館 「ローズマリー」によつて

出演

子殺しの女（渡瀬日実子）
花の首飾り館女主人（花屋敷響子）
刑事（加古川恭介）
蒼い水差しの男（三田村清司）
古鏡の少女（高見麻紀）

「一」 プロローグ

客が紛れ込んだのは都会の片隅でひっそりと息をこらしているがらくたショップである。外から見ればただの廃墟。色褪せた看板、どこにか「万年露」という文字が読み取れる。店内には思い出に捨てられたモノたちが雑然と薄闇の中に沈んでいる。

懐中電灯を手にした洋装の老夫人が一つ一つの「モノ」に語りかけながら入ってくる。そのたびに「モノ」はその死に顔を浮かびあがらせる。

老夫人「おや？あんたまだ売れ残っていたの？早く買い手が見つかるといいねえ」

「どうしたの？哀しげな顔して、あんたのその傷は治りませんよ。あら、あら、ま
だこんな所に血がついている。全くひどいめにあったわねえ……」

「フフフ：あんたは目立たないよう隠れていなさい。あなたを手に入れた人には
ろくな事が起こらないんだから。これ以上、人様を苦しめちゃだめよ」

「まあ、ここにいたの。探していたのよ。山中さんが初恋の人にもらった
探していらつしゃるの」

等と呟きながら老夫人、個々の品物に光を当てる。ここはまさに時代の墓場。招き猫、
風と共に去りぬのポスター、アフリカの木彫り人形、能面、蓄音機、スリランカの木彫り
面、アンティーク椅子、象のタペストリー、曼陀羅 e t c … いずれもどこかいかげん
く、難ありの寄せ集めのがらくた。疲れ果てたガラクタ。老夫人は柱のスイッチをひね
って店の明かりを灯す。そして、永年そうしてきたようにカウンターの後にある椅子に
正座するとまるで置物のようにまわりの「モノ」たちと同化してしまう。

どういつ品物をどういつ風に配置するか。商品の展示はその店のすべての主張の表現で
す。ここにはいわゆる大道具はいりません。小道具である「モノ」たちが、それぞれに客
席から見える位置に存在し、自己主張しているのです。「モノ」たちが語りだす芝居。忘
れられ、傷ついた「モノ」たちが主役なのです。この日、この店で始まる奇妙な物語は、
そのほんの二つのエピソードにすぎません。

一人の中年男(三田村清司)が店に入ってきて来るが、何か奇妙なものを見付けたように引き返すが好奇心に負けて、意を決して店の中に恐る恐る踏み込む。

物珍しげに「モノ」を見て回る三田村。興味をひかれる「モノ」を見付るが、手にとつて見る勇氣はなく、指先で摘んではそつと元どおりにして手を払う。アクセサリーを摘み上げ、そつとポケットに入れようとした時。

老夫人 「いらつしやい…」

突然、声をかけられ飛び上がって驚く三田村。

老夫人 「お探し物はなんですか?」

三田村 「イヤ、別に、私は初めてでして…その、つまり、こんな所にこんなお店があったなんて気が付かなかつたものですから…」

老夫人 「豚の蚊取り線香、翡翠のイヤリング、スイス製の壊れた懐中時計、金魚の洗面器、青い眼のミルク飲み人形、ただし、それ片腕がないけどね。不二やのペ「こちゃん、サルの腰掛け、

三田村煙草に火をつけようとする。

老夫人 (見もしないで) 「ここは禁煙です!ヒビの入ったイタリヤングラス、今、あなたのポケットに入っているのはチベットの首飾り、(三田村、慌てて元に戻す)魂の中の忘れ物、あんたが思い出の中に捨ててきたお探しものは何ですか?」

三田村 「イヤ、だからですね、ボクは今日初めてこの店に気付いてですね…この店何時からあつたんですか?」

老夫人 「万年露はこの地で商いしてから四十七年になります」

三田村 「四十七年!そんな馬鹿な!ボクが生まれる前からあつたなんて!ボクはこの町に四十三年と五カ月と十一日、住んでいますね、こんな所にこつという骨董屋があつたの失礼だけど知らなかつたんですよ」

老夫人 「骨董屋じゃありません。ただのガラクタ屋、思い出のりサイクルショップ。後悔の廃品回収業、それに知らなかつたのではなく、あんたが記憶の彼方に忘れ去つただけなの」

三田村 「忘れていた?ボクがこの店を?とんでもない!こんな変わった店一度入ったら二度とわすれませんですよ!」

老夫人 「私は開店以来、一日たりとも休んだことはございません。毎日、夜の十二時に店を開け、あのビルの谷間が青く染まる頃に店を閉めるのでございますよ」

三田村 「夜の十二時に店を開けるんですつて?そりゃ気がつかかなかつたわけだ。しかし何故、そんな時間に店を開けるんです?」

老夫人 「お探し物は夜に限りません。月明かりが思い出を照らし、闇が汚れを隠してくれる。人は暗がりの中を彷徨つて、思い出を見付けるものなの」

三田村 「そうなんですかねえ。私は思い出も過去も過ぎたことはきれいさっぱりと忘れてしまふ主義でしてね。しかし、夜中に店を開けていたんじゃ商売になんないでしょう？この辺は夜になると野良猫だつて気味悪がつて近寄りませんよ」

老夫人 「お探し物はこれではございませんか？マレーシアはマラッカで見付けたガラスの水差し、あなたの思い出の中に捨てられていたガラスの水差し」

三田村 「だからね、お婆さん、ボクは捜し物なんてしてないと言つてるでしょう！ボクは偶然、通りかかつてちよつと覗いてみただけなんだから！」

老夫人 「ホホホホ…冗談ですよ。冗談。あなたどうせ冷やかしてしょ？それとも、思い出の水差しを買つていくかい？」

三田村 「思い出なんかないつて言つてるでしょうが！全くおかしな店だ。お婆さん、お邪魔しましたね！」

老夫人 「又、気がむいたら探しにおいで」

三田村 「あのね！……」

と言いつけてあきらめ頭を振りつつ出て行く。店を出て足早に去りかけた三田村、ふと足を止めて看板を見る。

三田村 「花の首飾り館、万年露…全く気味の悪い婆さんだ。それにしてもこんなところにこんな店があつたなんて…フーン！何が蒼い水差しだ！蒼い水差しなんて…蒼い水差し？…蒼い水差し…まさか…そんなはずはない。

そんな馬鹿な！あの水差しがここにあるわけがない。マレーシアで見つけた？そんなことがあるもんか！……それにしても……」

三田村、首を傾げながら去っていく。

【一】

入道に上手から一人の女、（渡瀬日実子）ワタラセヒミコが登場。年の頃は三十五〜六。古いトランクを持って何かを探しながらやってくる。着ている衣服は流行遅れでみすぼらしく、全身は気怠さと退廃に満ちつつも、どこか気丈さを隠し持っている。女は「花の首飾り館」の看板を見つけると手にしたメモと照らし合わせ、確認したあと、ちよつとぶてぶてしい態度を造つて店に入る。

老夫人 「いらつしゃい。お探し物はなんですか？」

女 「あなたが花屋敷響子さん？私、渡瀬日実子……」

花屋敷 「お探し物はなに？」

日実子 「たくさんあるわ。お金、働き口に金持ちの男！失つた青春、気に入っていた琥珀のネックレス、さつきそこで落とした赤いヘアピン、とりあえずは、今夜の寝場所つてところかしら？」

花屋敷 「あなたが本当に探しているのはそんなものじゃないはずよ」

日実子 「本当の捜し物？そんなのあったかしら？」

花屋敷 「ま、いいでしょう。ともかく日実子さん、お帰りなさい」

日実子 「はい、ただいまあ……と言いたいところだけど何故、私がただいまっていわなくちゃならないのよ？何故、あなたは私にお帰りなさいと言うの？」

私、出所する一週間前にこの手紙を受け取ったの。くもし行くところがなければお尋ね下さい。花の首飾り館主人、花屋敷響子。く……何なのこれ？花の首飾り館ってどうやらこのお店の名前のようだけど、そのオーナーが何故、私に手紙をくれたの？あなたは誰？私とどういう関係があるのよ……」

花屋敷 「私の亡くなった主人は商社マンで、世界の国々を旅したのでございますよ。

インド、タイ、ビルマ、ニューギニア、セネガル、ルアンダ、中国、ロシア……それからどこだったかしらねえ……そうそうカナダにパキスタン、北朝鮮……は行つてなかったわねえ。だって、あの国の特産品といえば、偽札と麻薬に潜水艦、ミサイル。しかも、みんな不良品。

ここにあるのはみんな主人が集めたガラクタなの。何の意味もないただのガラクタ……これはインドで買って来たサドウーの首飾り、ヒンドウーの修業者であるサドウーは神様に誓いを立てるんだよ。く私は一生片足をあげて過ぐします……って誓えば、死ぬまで片足を上げて暮らすの。く私は箱の中で修業します……って誓えば、小さな箱の中でこんな風になつて過ぐすのぞ。

ある日、主人はガンジス川のほとりで一人のサドウーに出会った。その人は大きな木の下で素裸で五十年も修業していたんだ。素裸だよ！しかも、脱腸のためソフトボールのように膨れ上がった金玉を弄びながらね。

そこで主人はくどうして素裸で五十年も修業しているんだ？……と聞いたの。そしたら、そのサドウーが言つにはくあなたがたは家族でピクニックに行った時に木の下で一休みするだろう。その一休みが私の五十年なのだ……って答えたのさ。……それに比べたら、あなたの刑務所での七年なんて……」

日実子 「お説教するために私をここに呼んでくれたのなら結構よ。あなたにムシヨでの七年が分かつてたまるものですか！」

花屋敷 「ともかく日実子さん、おかえりなさい！」

日実子 「はい……ただい……だからさあ、悪いけど私、はつきり言つてここにすればお金が仕事がもらえるかもって期待したの。あなたは要するにボランティアの民生委員みたいなもんでしょう？私、イヤなんだなあ。民生委員とかボランティア……って言うの、何も分かつてないくせにお説教ばかりたれてさ。さあ、何くれるの？お金？仕事？それともここに……ある金目の物？……分かつてるわよあ別に何もくれなかつた……っていいのよ。私、乞食じゃないんだから」

日実子、ポストンバッグを持って立ち去ろうとする。その日実子の足を止めたのは古い蓄音機から流れてくるかつての日実子自身の歌声である。衝撃で萎縮し、震える日実子

木の葉が舞い散る朝

あなたは永遠の眠りについた

小さな瞳はもう開かない
私に抱かれてお眠りなさい

何故、泣かないの

お願い、泣いてよ

何故、笑わないの

お願い、笑顔をみせて

いつも一緒にいたいから

日実子 「（押し殺した声で）やめてよ…お願い…やめて…」

日実子 泣き崩れる。

花屋敷 「お探し物はございませんか？魂の中の忘れ物。浜辺に打ち捨てられた三輪車、庭の片隅に埋められた金魚のお墓。私のお店は命を無くしたガラクタの墓場、そのガラクタと一緒に暮らしてますとね。見えてくるんでございますよ。この世の行く末がね。真つ赤な真つ赤なカラスに啄ばまれた宴の跡がね。」

日実子 「あなたは誰？何者なの？どうしてこの歌を知ってるのよお？」

花屋敷 「日実子さん、私はこの所、すっかり体力も気力も落ちてね。そろそろお迎えがくる頃じゃないかと思ってるんでございますよ。唐突かも知れないけど、あなたにこの店を任せたいの。何故？って思わないで。ガラクタばかりだけれど、捨て去った思い出を探しにふらりとお客様がいらっしゃるの。女一人が生きていくには充分よ。」

日実子 「私に？この店を？どうして？」

花屋敷 「理由はないわ、私がそう決めたの」

日実子 「勝手に決めないでよ。それに何？あの歌？ひどいよ、ひどいじゃないかあ。七年間もムシヨ暮しをしてきたと言うのに。何故、思い出させたの？ようやく私の中からあの子の思い出が消えたと言うのに……」

花屋敷 「どうして忘れようとするんだい？あなたが愛した命をさ。死んだ我が子を抱えて一年七カ月も歌い続けてきたあなたの気持ちは嘘だったのかい？」

日実子 「……誰も信じてくれなかった。私はあの子を殺しちゃいけない。ある朝、目を覚ましたらあの子が私の横で冷たくなっていったんだ。あの子はねえ、産まれた時から虚弱で、朝も、昼も、夜もビィビィ泣いてさ。私が歌ってやるとようやく安心して眠ったんだ。眠ったからもう大丈夫かなあと思って、そと、そとと布団に寝かせると、ピクンって驚いたように目を覚ますんだ。

大丈夫、ママ、いるよ。ママがそばにいるからね。……

私、また抱きあげて歌ってやるの。くちなしの花が咲いた朝、

私にあの子が殺せるわけないよあ」

花屋敷 「そとともさ。あなたに自分の子供を殺せるもんかね。死んだ我が子をダンボールに入れて、ミイラになるまで抱え歩いてさ。片時さえも放せないから、仕事

先のクラブの冷蔵庫に子供を預かってもらい、歌い終わったら又、アパートに連れて帰る。そんなお前さんに子殺しなんて出来るもんかね。」

日美子 「誰？あんたは何者なの？誰かはわかんないけれど、そういう風に言ってくれた人は初めてだわ。でもね、今更、同情してもらっても仕方がないの。私はそのために七年という時間を失ったんだからさ」

花屋敷 「失なちゃいないさ。現にあんたは今も死んだわが子のために涙してるじゃないか。七年の歳月はあんたの母親としての心を守ったんだよ。」

何時の間にかひとりの男がシルエットに浮かび上がる。刑事、加古川恭介である。

刑事 「まるで反省がない！」

日美子 「刑事さん！」

加古川 「悪いが出所してからのあなたの行動を監視させてもらっている。渡瀬日美子、三十六才。元、クラブ歌手。あなたは生まれた子供が邪魔になって絞殺。首を絞めた痕跡が完全に消えるまで持ち歩き、まるで果物でも預けるように仕事先のクラブの冷蔵庫に遺体を預けた。不審に思った従業員が中身を改めて、あなたの犯行が発覚したんだ。その犯罪性は裁判でも立証された。私は7年の刑期じゃ納得できないが、それはまあいいとしよう。刑期を終えた以上、あなたの罪は問われない。しかし、自分の子供の首を絞めて殺したという事実は、永久にあんたのこころの中に残るんだ。」

日美子 「出ていって！あんたとは話すつもりはないわ。私がどんなにやっつけないと言いつ張っても、聞いてもくれなかったあんたにあれこれ言われたくないわ。第一、晴れて出所した私を何故付け回す権利があるのよ！」

加古川 「残念ながらそれがあるんだな。子殺しの件じゃない。あんたが出所する一カ月前、青森県は七戸の山林で白骨死体が発見されたんだよ。仏さんの歯の治療あとから遺体は野田明夫と判明した。頭蓋骨に残る傷跡から何ものかによって撲殺されたことがわかった。あんたが殺した子供の父親、つまり、あんたの恋人だった男だよ。」

日美子 「それはムシヨに訪ねてきた刑事に追求されたわ。でもね、私がこうして出てこられたというのは疑いが晴れたってことでしょっ？」

加古川 「青森県警はどう考えているかはともかくも、私は違う。害者の身辺調査の結果殺されたのは八年前の十二月二十五日前後、そう、あんたが子供をクラブの冷蔵庫に預けたまま姿をくらました三日間と時期が一致するんだよ。しかも、殺された野田さんが銀行から引き出した一千万の金が行方不明でね」

日美子 「そんなお金があれば、墓をもすがる思いでこんな所にこないわよ」

加古川 「まあ、いいでしょう。出所しても当面は居場所を明らかにする義務があるんだから、夢夢、金を持って姿をくらまさないように。たとえどこに行こうと、私は諦めませんか。何しろ私は青森県警にいる時からあんたを追ってきたんだ。はいよ、これあんたがそこで落とした赤いヘアピン……」

加古川、赤いヘアピンを渡し、慇懃に挨拶して出ていく。茫然と立ち尽くす日実子。

日実子 「どうしてこういうことになるの？どうして？……7年の刑期を終えて出てきたら今度は殺人事件の犯人として追われるわけ？どうして？どうしてなのよ
お！」

日実子、響子の足元に崩れる。やさしく日実子の肩を抱く響子。

花屋敷 「そろそろ夜があけるわ。朝の光は今の私たちには眩しすぎる。あなたがいつでも帰ってこられるように、二階に部屋を用意してあるわ。さあ、ゆっくりとお眠り。」

日実子 「あなたは誰？どうして私にやさしくしてくれるの？」

花屋敷 「フフフ……ここにあるすべてのモノには、一つ一つに思い出がある。一つつに物語がある。それをあなたにお話し終わった時、あなたは私のすべてを知ることになるわ」

明かりが絞られていき、替わって朝の光が差し込んでくる。その柔らかな冬の光に浮かびあがる思い出の「モノ」たち。

店の外では加古川刑事が看板を見つめている。

加古川 「花の首飾り館、万年露……か。何故、こいついつ名前をつけたのか？偶然とは思えない、偶然であるわけがない。ミイラ化した赤ん坊の首に巻き付いていた朽ち果てた花の首飾り。その首飾りに殺された子供供の皮膚の角質が付着していたんだ。首飾りに使われた花はローズマリー。和名は「万年露」絶対に偶然なんかであるものか！」

ふと加古川刑事、怪しげな人影を認めて物陰に隠れる。店の前をうろつく三田村。

【三】

三田村 「どうも気になるんだよねえ……あの蒼いガラスの水差し。何故、あれがあそこにあるのか？…平成十五年十二月二十四日、俺は青森駅に降り、改札を出てタクシーを捉まえる。肌を刺す吹雪が痛い。行き先を告げる。運転手はなにやら話し掛けたが、何を言ってるのかわからない。あいつ見事な金歯だった。窓に入ばりつく雪の結晶、苛立ちを煽るウィンカー。俺の頭の中は虚しい言い訳けが渦巻いていた。

野田を誤魔化しきることは不可能だ。俺は野田から預かった金を使い込んでしまった。あいつは決して俺を許すまい。どうしよう！どうしたらいいんだ！野

田は金を持って青森に來いと言った。何のかんのと誤魔化し続けたが、年内にカタをつけたという奴の要求を俺は断れなかった。こうなったら、あいつを殺るしかない！野田は別荘で俺を待っていた。奴は酩酊状態だった。

金、持って来たか　ああ、ここに　俺は衣類しか入ってないバッグを重そうに持ち上げて見せた。青森の寒さは半端じゃないだろう？ま、ここに來ていっぺえやれや　いやあ！こいつはありがたいねえ！そこにバーボンのボトルがあり、その傍にあの青いガラスの水差しがあった。男二人のクリスマスイブは味気ないすねえ　とボトルに手を伸ばした時だった。突然　金はどうしたあ！　え！？それはあのおく　金はどうしたあ！　だからですなあ！それはちゃんとここに！　…ん？なーんだ謔言かあ・ひええ！驚いたあ！心臓が凍るかと思つたよ…

奴は酔い潰れてぶつ倒れ、謔言で　金はどうしたあ！　と叫んでやがる。今だ！俺は水差しをやつの頭に降りおろす。ポコンと鈍い音がした。奴は白目をむいて俺を見る。俺はまたもや振り下ろす。死なない、死なない！何故？死なないんだあ！俺は焦つた。咄嗟に奴の首を締め上げた。　た、頼むから死んでくれえ！　やがて野田は蟬人形のように固まった。　金はどうしたあ！　それが野田の最後の言葉だった。　…どこからかジングルベルの歌が聞こえていた。

ジングルベル、ジングルベル、…　チクシヨウ！俺はあの歌を聞くたびに　シンデルベエ、シンデルベエ　と聞こえるんだよ！だが、間違はなくあの青いガラスの水差しは死体を埋めた場所から離れた所に埋めてきたはずだ。それが何故この店に？…　そうだ！そ知らぬ顔で買ってしまえばいいんだ」

三田村、店に入ろうとして躊躇する。

三田村　「待て、待て、待て…あのバアさんがあの水差しがどういうものかを知っていたとする。それをわざわざ買いにきた男…これは怪しい、ピンと閃く。　110番、刑事が飛んできてガシヤ。（首を振って）ブルブルブル…こりやだめだ。…　そうかあ。他のものを買って、あたかもついでと言つた感じで、さりげなく、　この水差しももらうとこつかな…ハハハハ　何だかわざとらしいな。もつと力を抜いて…　この水差し…ついでだから…ハハハ…　どうもいかななあ！きつと心にやましいところがあるから言葉にでるんだ。やましくないと思えばいい、やましくない！やましくない！やましくないぞあ！…　やっぱり、やましいんだよなあ。だいたいあんな口が欠けた水差しを誰が買うもんか！それを買ってきた奴は怪しいに決まってる！

私が店に入るや否や、あのバアさん　　思い出の水差しを買ってきたのかい？ヒヒヒ　と言つに決まっている。ダメだダメだ、とてもそんなやばい橋は渡れない…」

と言いつつ立ち去るが再び振り返って

三田村 「しかし、何故？あの蒼いガラスの水差しがこんな店に！？」

三田村、首を傾げながら消えてゆく。

「四」

替わって、花屋敷響子がガラクタを入れた籠を手に舞台袖から客席へ。

花屋敷 「お探し物はなんですか？初恋のラブレター、着せ替え人形、臍の緒、古鍵、亀の子たわし、小学校の通信簿、ペンテルのクレヨンセット、紙やエンピツはもちろん、指までスパツと切れる肥後の守。近ごろの世の中、この年寄には堪えます。空気が薄くて息苦しゅうございます。人と人との隙間風が寒うございます。

越後蒲原どす蒲原で

雨が三年、旱が四年

出入り七年、困窮となりて

新発田様へは御上納が出来ぬ

田地売るかや、子供売るか

田地は小作で手がつけられぬ

姉はじゃんかで金にはならぬ

妹売るとて御相談決まる

わたしや上州に行つてくるほむじ

さらばさらばよ、おつしあんとらひらば

さらばさらばよ、おつかさんとらひらば

またもさらば、みなさんとらば

十二で奉公、十五で芸者、十七で引かされて、十九で父無し児。それからいくつか恋をして、ある日、新聞に載ったわが子は少年A。愚かな人生ではございりましたが、今ほど寒くはございませなんだ。殺伐とした世相に生き長らえておりますとね。このババアの胸に、フツフツと悲しみがこみあげて来るんでございますよ。消えかかった命の 屁 でもない悲しみがね。

坊やよい子だねん寝しな、

ねんねごとつちゃん 亀の子ごつちゃん、わしや七面鳥

かか欲し、かか欲し、おかか欲し、おかかもらつて何にする

昼はまま炊き、洗濯に、夜はポチャポチャ抱いて寝て、

抱いて寝たけりゃ子が出る。

女の子ならおっちゃんぶせ、男の子ならとりあげろ（茨城県筑波の子守唄）

この国に伝わる残酷で悲しい子守歌。その子守歌が忘れられた今も私には
ねんねごとつちやんの唄が聞こえてくる。

お探し物はございませんか？あなたが落として来た魂の忘れ物、本物の涙、友情、泥だらけの子供服、鼻水でテカテカに光った学生服、竹のゆりかご、近所付き合ひ……

とつぶやきつつ客席後方の出口へ。

【五五】

入れ替わって「花の首飾り館」に明かりが灯り、日実子が浮かび上がる。クラブ歌手 風
な衣装を身につけた日実子、我が子に子守唄を聞かせている。

くちなしの花が咲いた朝

あなたがこの世に産まれてきたの

もみじのような手を震わせて

私に抱かれて泣いていた

何が悲しいの

お願い、泣かないで

どうして涙を浮かべるの

お願い、泣かないで

ママがいつも傍にいるから

木漏れ日さすたそがれどき

あなたがはじめて笑ってくれた

天使のようなほっぺをふくらませ

私を見つめて微笑んだ

何がおかしいの

お願い、教えてよ

何がうれしいの

おまえの笑顔を

ママが忘れずにいたいから

舞台袖に立つ加古川刑事、調書を読み上げる。

加古川 「平成二年十二月二十八日、東京池袋のサパークラブのコックがクラブ歌手から
冷蔵庫に保管して欲しいと頼まれた小包みを三日たっても受け取りに来ない

た　　め、中を開けて見たところ、ミイラ状の赤子の死体を発見、届け出た。

調べによると包みを預けた女は妻子ある男の子供を出産したが、邪魔になって絞殺、犯行の発覚を恐れて、死体をドリンク剤のダンボールに入れ、一年七ヵ月に渡って持ち歩いていたものと思われる。容疑者渡瀬日実子は犯行を否認。赤子は虚弱体質による自然死であり、日実子自身は不倫の相手の子ではあっても自分で育てるつもりだったと主張しているが、アパートは子供不可でクラブ歌手が仕事の彼女は子供を置いて働きに出るのは不可能であり、そのため、日実子は子供を出産して以来、仕事を休んで子育てに専念していたというが、預金が底をつき限界に達していた。」

日実子

「私、あいつには子供が出来たことを隠していたの。どうしてもあいつの子供が欲しかったから、お腹が目立つ前に別れて東京に出てきた…出産まで働いて金を貯めたら、半年ぐらいはどうにかなるだろうと思ったのよね。」

八八八…どうにもならなかった。やっと仕事が見つかったのが東京に来て、二ヵ月目、唄い始めたらずくにコレ（妊娠）がばれちゃってさ。

病院にも行かないで、子供は不可のアパートでこっそり一人で産んだの。産まれた時、この子ぜんぜん泣かないから心配になって、お尻をピシヤピシヤたたいたら、ようやく細かい声で泣きだした。まるで、産まれた時から周りに気兼ねしているみたいにな。こいつ産まれた時から虚弱だったんだよ。

ハサミで臍の緒、切ったんだ。簡単に切れると思ったたらゴムみたいに固くってさ。産まれて三日目に家主にはれちゃった。もう毎日のように契約違反だから出ていけって怒鳴り込んでくるんだ。出ていけたってさあ、金もないのになんて行けってのね。」

加古川

「日実子は隣近所、家主に気を遣って、赤ん坊を押入の中で育てたと口述している。家主や隣の住人の証言によれば、顔を合わせると逃げるように立ち去り、出ていくようにという勧告には、行くところがない、私に赤ちゃんを殺せというのか！とすごい剣幕で楯突いたという。そういう状況が彼女を子殺しへと追いつめたのだろうが、本人は頑として犯行を否認している。…素直に認めれば情状の余地もあったろうに…」

日実子

「どうしようもないから乳児院に行ったんだよ。生活困窮者のための施設だとい

うから行ったのに、一ヶ月前まで私に収入があったからダメなんだって。それでも、私、何が何でも育てるつもりだった。子供のために意地を捨てて思い切つて、あいつに電話したんだ。あいつ、まるでお役所の苦情係みたいな口調でさ。

<そつらが勝手に逃げ出でて、今更、助けてくれと言われてもですわね>
<その赤ん坊がボクの子供かどうかね、一度、DNA鑑定を受けてだなあ>
<糞食らえ！っていうんだよ！何がDNA鑑定だ！そんなもんにはすぎらなきや

父親であることがわかんないのかよー！

加古川 「日美子は赤ん坊の父親である野田に度々、電話を入れたようだ。その結果、五万円程度の金は送られてはきたらしい。乳は出ず、ミルク代にも事欠いて、おしめが足りず、自分の下着を引き裂いておしめ代わりにしていたようだ。私には理解出来ない。何故なんだ？何故、それほどまでして不倫の子を育てようとしたんだ？」

日美子 「私、三歳の時、貧乏だったから養女に出されたんだ。ところが、子供がいなかった夫婦に男の子が産まれちゃってさ。そうなると私なんか邪魔でしかないよね。継母にいじめられてとくればよくある話だけとさ。いじめられるより、無視される方が余程辛いよ。私はいないのも同じ、産まれて来なければよかったよ。中学卒業と同時に飛び出してそれっきり。私、自分が産んだ子はどんなことがあっても手放すもんかって思ったんだ。」

加古川 「三年前に亡くなった私の妻は最初の子供を流産で失った。以来、ことあることに、妻は流産した話になると泣くんですまづ。あの子はいかにそうなことをしたと言っ。あの子？あの子ってどの子なんだ？妊娠四カ月、まだ、人間の姿さえしていない胎児が何故、あの子なんだ？」

日美子 「……ある朝、この子、冷たくなってた。ママママ、もつ苦しまなくなっちゃっていいからね、そう言ってくれてるみたいだった。私、この子、誰にも渡せないって思った。泣くことも、笑うこともしなくなっただけとずつと傍にいてあげようって思った。私の子供だもん。私の愛の証だもん。明天さん、私、あなたとこのこと後悔してないよお。」

日美子、立ち上がって唄い始める。客席がクラブに変身したようにナイトクラブ風のライトに染められて行く。

あなたがいて私がいいた。
この世で一番大切なあなたがいいた。
あなたの腕の中で、私は子供になる
涙があなたの胸を濡らす
熱い息が私の髪をくすぐる
帰らないで 帰らないでここにいて
さよならは言わないって言ったのに
風よ 風 吹き抜ける酒場、ランポー
やさしいほほ笑みに抱かれていたい

あなたがいて私がいいた。

この世で一番大切なあなたがいた。
あなたの吐息で 私のところが溶ける
体の中に嵐が吹いてる
あなたの鼓動が震えてる
やさしい刻をこのまま止めて欲しい
後姿は見せないって言ったのに
風よ 風。吹き抜ける酒場、ランボー
じっと思い出を抱き締めていたい

「一六」

日実子、歌いながら客席後方に消える。クロスして「花の首飾り館」に怪しい人影。
何かを盗み出そうとしている。三田村である。三田村、蒼い水差しを見付けた所でその
姿がライトに浮かびあがる。

三田村 「あつたあーやつぱり、これだー…それにしても何故、これがこんな所にある
んだ？あの時、俺は確かにこの蒼い水差しを別荘裏の雑木林に埋めた。それが
どうしてここにあるんだ？あの婆さんが掘り出したのか？一体、何のために？
これがここにあるってことは、誰かが事実を知っていると言っていることだ。だが、
待てよ…しかし…ま、いいや、とにかくこんな物があったんじゃ、夜もお
ちおち寝てられない…」

と言いつつ三田村、バッグに水差しを入れて持ち去ろうとするが加古川刑事現われる

加古川 「その寝むれない事情とやらを聞かせてもらいましょうか」

三田村 「誰だ？」

加古川 「永年、刑事をやってるが、張り込みの現場でこそ泥に遭遇するのは滅多にある
もんじゃない。しかも、ただのこそ泥じゃなさそうだ。」

三田村 「イヤ、あの、これはですね、気にいったので買おうと思ったんですが、店の方
がいらっしやらないので、とりあえずお預かりして……」

加古川 「ほうー、あなたはモノを買うのに閉店中にドアをこじ開けて、暗がりの中で買
物をするのかね」

三田村 「ス、スイマセン。つい出来心でして、こんなこと初めてなんです。品物はほら
この通りお返ししますから、勘弁してください！」

加古川 「常習犯じゃないのはい目で分かる。俺はこそ泥には興味がない」

三田村 「ありがとうございます。一度とこういふことは」

加古川 「こそ泥には興味はないが…殺人は見過ごしには出来ない」

三田村 「さ、殺人なんてとんでもない！何を根拠にそんな！」

加古川 「匂うんだよ。あなたの身体から、その蒼い水差しからね。オツと触るんじゃな
い！大事な証拠物件になるかも知れないんでね。さ、じっくり話を聞こうか」

加古川、三田村に手錠をかける。

三田村 「勘弁してください！お願いします！家族も仕事もあるんです！ほんの出来心な
んです！刑事さん！」

加古川 「名前はなんていうんだ？」

三田村 「三田村です。三田村清司です！」

加古川 「これから署に連行してあなたを担当の刑事に引き渡すんだが、こそ泥専門のデ
カさんと殺し専門のデカさん、どっちがいい？」

三田村 「こそ泥でお願います！こそ泥担当のデカさん大好き！私はこそ泥です！」

加古川 「よし、分かった！間違いなく殺人料だ！」

三田村 「そ、そんな馬鹿な！」

三田村、連行されて行く。加古川、携帯電話を取出し「あぁ、加古川だが、張り込み現場
でこそ泥を押さえたんだが、殺しに関係しているようだ。これから署に連行する。至急
現場に担当をよこしてくれ。現場は東京都世田谷区……。」と話ながら消える。

「 7 」

花の首飾り館に明かりがとると日実子が立っている。

日実子「どつしたのかしら？ドアが壊されているのに、荒らされた様子もない。もちろん
このガラクタじゃ、何を盗られたって分かりやしない。だいたい無茶なのよねえ
客が来たって私じゃいくらで売っていいのかわかんないもん。あのお婆さん、客
に値段をつけさせるといっけど、本気で商売する気があるのかしら。客がつけた
値段に三回、首を横に振ってそれでも欲しかったら売っていいと言っただけど
……ま、いいかぁ、どつせ客なんて来ないんだから。（アフリカの面を手にとっ
て）アフリカの魔よけの面……この面の持ち主は火事に遭って焼死。何が魔よけ
よ！このお面の呪いだと言っただけど……ふん、呪いねえ……（顔にかぶるマネをす
ると取れなくなってしまう）ウッッ、タスケテ……（面をとって）冗談よ。

魔よけの面だの、呪いの曼陀羅だの、恨みの人形だの、いかがわしいガラクタばか
り、もううんざりよ！それにしてもあのお婆あさん、私に店を預けてどこに行っ
てしまったのかしら？ここにあるガラクタにまつわる陰気臭い話をさんさん聞かせて
くれたけどさ。だから、何だっと言っのよあ！私もここにあるガラクタのひとつに
すぎないってわけ？……私も……ここにある……ガラクタの一つ……ガラクタ……花の
首飾り……万年露……イヤァ……！」

日実子何かを思い出してしずくまを。

日実子「……お宮まいりに行くかわりにあの子にローズマリーの花で首飾りを造って

やった。林檎の汁をスプーンで飲ませてあげた。お誕生日には、いちご模様のベビー服を着せてやった。1年7ヵ月…短い間だったけど幸せだった。あの子の身体がいたまないように防腐剤をいれて、まわりをラベンダーで埋めてあげたの。あの花の首飾りとこの店の名前は偶然の一致なのかな。偶然じゃないとしたら何のために？…あのお婆さん…あいつ何者なんだよあー！」

「十七」

日実子、改めて店内のガラクタを見てまわる。そして、ふと目に止まった古鏡を手にとって自分の顔を映してみる。

日実子 「へえ、昔の人はこんなもんで自分の顔を映していたんだ。この鏡を使っていた人ってどんな女だったのかなあ…」この鏡の最後の持ち主は、子宮癌で死んだって言ってたけど、代々、鏡の持ち主は病気になるって死ぬなんてことあるのかな。恋する女の顔を映した鏡、小皺を隠そうと必死に化粧する女を見ていた鏡、激しい憎悪を吸い取った鏡、そして、とめどもなく溢れる涙に目を背けた鏡……私の中にある鏡はあの子の笑顔が焼き付いたまま、もつ、何も映さなくなってしまった……（客に気付いて）あらっ、いらっしやい。「

二十歳前後の女の子が入って来る。高見麻紀。ちょっと突っ張った所があるが、どこか寂しげな影を感じさせる。

麻紀 「その古い鏡、ちょっと見せてよ」（古鏡を渡すと麻紀は眺め透かして。）

麻紀 「お婆さん、これいくらだよ」

日実子 「そんなもんに興味があるようには見えないけどね」

麻紀 「何に興味持とうと勝手だろうっ？！」

日実子 「そりゃ勝手だけどさあ。売るか売らないかも私の勝手だからね！」

麻紀 「お婆さん！商売してんだろっ？客がこれはいくらって聞いてんだよあー！」

日実子 「だから、売る気はないって言ってんだよ！」

麻紀 「急にしおらしく振る舞って」（これ死んだママの形見なんだ…）」

日実子 「そんな大事なものがどうしてここにあるのよ」

麻紀 「……ママの形見で、何だかもったいぶったケースに入ってるから、きっと高く売れるに違いないと思ったんだ」

日実子 「それで、この店に売ったってわけ？」

麻紀 「うん」

日実子 「それで高く売れたの？」

麻紀 「あのババア、足元見やがって…これはそんなに古いもんじゃない。五千元なら引き取るが、それ以上、欲しけりゃ他の店に行きなっといういやがんの。私、金、欲しかったからさあ……」

日実子 「五千元で売ったんだ」

麻紀 「私、この鏡、買い戻したいんだ！頼むよ！」

ポケットからしわくちゃの五千円札を取り出す。

麻紀 「悪いけど買った値段で。いいでしょう？お願い！」

日実子 「ママの形見を売って後悔したのかい？」

麻紀 「ことさらにしおらしく」「ハイ。ママの形見を買い戻そうと一生懸命、アルバイトしてお金を作ってきたんです！」

日実子 「そうだったのぉ。それは偉いわねえ！感心ねえ！……と言いたい所だけどその手には乗らないよ。近ごろの娘はしたたかだねえ！何がママの形見よ！」

麻紀 「わかったよ！売る気がねえんらしいよぉ！なんだよぉ！こんな鏡！こないださ。デパートで同じような鏡が5万円で売られているのを見たんだ！あのババア！ってアツタマにきたただけだよ！」

日実子 「それで、買い戻してもっと高く売ろうってわけ？」

麻紀 「……おばさん、ひょっとしたら店番でしょっつだったらさぁ、私、七千円で買ってやるからさぁ、おばさん、二千円儲けりゃいいじゃん！」

日実子 「子供が大人相手にせこい取引するんじゃないよ！」

麻紀 「再びしおらしくなって」「ごめん！私が悪かったから七千円をお願い！」

日実子 「やだね！どうしても買い戻したいなら拾万円置いていきな！」

麻紀 「十万円！デパートでも五万円なのにどつして十万も取るんだよぉ！」

日実子 「他でいくらだろうがウチは十万円なんだよ」

麻紀 「てめえ、まじかよオ！五千円で買ったものを十万で売るなんてあのババアよりひでえじゃないか！」

日実子 「何でもお言い！いくらで売ろうがこつちの自由なんだから」

麻紀 「お願い！（ポケットから三千円と小銭を出して）これしかないの！」

日実子 「（首を振る）」

麻紀 「お願いします！」

日実子 「ダメと言ったらダメ！あきらめて帰んな！」

麻紀 「分かったわよ！十万で買うからローンにしてよ！」

日実子 「あんた、バカじゃないの？十万で買ったら損する……あんた、ひょっとしたら、やっぱりママの形見だから買い戻したいんじゃないの？」

麻紀 「……………」

日実子 「それならそうと何故、最初から素直に言えないのよぉ」

麻紀 「素直に言ったけどおばさんが信じてくれなかった」

日実子 「あんたが変に突っ張ってるから、伝わらないんだよ」

麻紀 「……去年の九月、ママ、死んだんだ。私、七才の時、親父がママを捨てて出て行ったの。ママ、スーパーでマネキンやりながら私を育てたんだ。ウインナーに爪楊枝を突き刺して、くねえ、ちよっと味見してこらんよ、ご主人のお酒のつまみ、お子さんのお弁当にどっつ、……クラスメートがママのマネして冷やかしたわ。私、そんなおママ見るのがイヤでスーパーには近づかなかった。

あいつ、バカだよ！そんな苦勞させられてんのに、親父からもらったって古い鏡を大事にしやがってさ。ママ、死んだ時、真っ先にここに売り飛ばしてやったんだ」

日実子 「何故、今になって買い戻す気になったの？」

麻紀 「パパと別れた理由をママは死ぬまで私に話してくれなかった。話してくれなかったけどさ。ママはパパと知合ったことを後悔してないんだと思っただんだ。後悔してないから、パパからもらった鏡を宝物に出来たんだと思っただんだ。

きつと素晴らしい思い出があっただんだ。それがあから、頑張れたんだ！そう思わないとあまりにもママの人生がみじめすぎるもん……」

日実子 「あんた、今、好きな男の子が出来たんじゃないの？」

麻紀 (首肯く)

日実子 「八八……そんなことだろうと思っただよ。あんた、名前はなんて言うの？」

麻紀 「高見麻紀……」

日実子 「そ。その鏡、持っていいよ。お金いらない」

麻紀 「そ、そんな！」

日実子 「いいからさつさと持って行きな！」

麻紀 「本当にいいんですか？私、これを高く売るかも知れないわよ！」

日実子 「手に入れた以上、売ろうと捨てようとおんたの勝手だよ。私ね、おんたの言ったことが嘘でもないの。何だか信じたい気持ちになってきちゃった。人の腹を探ったり、取引したり、騙したり、騙されたりは、もう、ウンザリ。麻紀ちゃんって言ったけ、ありがとね。あんたの目、結構、優しいよ」

麻紀 「わ、私、本当は……」

日実子 「黙れ！若者！さつさと消えろ！」

麻紀 「あ、ありがとうございます！」

あなたがいて私がいいた。

この世で一番大切なあなたがいいた。

あなたの腕の中で、私は子供になる

涙があなたの胸を濡らす

熱い息が私の髪をくすぐる

帰らないで 帰らないでここにいて

さよならは言わないって言ったのに

風よ 風。吹き抜ける酒場、ランボー

やさしいほほ笑みに抱かれていたい

あなたがいて私がいいた。

この世で一番大切なあなたがいいた。

あなたの吐息で 私のこころが溶ける

体の中に嵐が吹いてる

あなたの鼓動が震えてる
やさしい刻をこのまま止めて欲しい
後姿は見せないって言ったのに
風よ 風。吹き抜ける酒場、ランボー
じっと思い出を抱き締めていたい

「八」

いつのまにか刑事の加古川が立っている。

加古川 「どうやら、あんたを誤解していたようだね」

日実子 「刑事さん……」

加古川 「この店にこそ泥が入ってね。偶然、出会わせて捕らえてみれば、なんとこれが殺人犯。しかも、あんたの恋人だった男を殺した犯人だと分かったんだよ。

日実子 「どういうこと？こそ泥だとか、殺人犯だとか、私、言ってることがぜんぜんわかんないよ」

加古川 「つまり、開店前にこの店に男が忍び込み、蒼いガラスの水差しを盗もつとした所を、居合わせた私が逮捕した。男の名は三田村清司43才。奴には前があつて、調べてみると、青森で取り込み詐欺をやつて手配されていることが分かった。しかも、あんたの元恋人、野田明夫もその仲間だったようだ。三田村が何故、蒼いガラスの水差しにこだわつたのか？改めて青森県警に問い合せて見たら、殺された野田の頭蓋骨から、極微量のガラス片が見つかつており、三田村が盗もつとした蒼いガラスの水差しの成分と一致したんだ。」

日実子 「その水差しで明夫が殺されたつてわけ？」

加古川 「致命傷となつたのは、絞殺だが、おそらく、三田村は野田と分け前をめぐつて争いとなり、水差しで頭を殴つたあと、首を絞めたんだろう」

日実子 「明夫が詐欺の仲間だなんて、あの人、そんな人じゃないよ」

加古川 「まだ、あんな男を庇う気なのか。あんたを捨て、自分の子まで見捨てた男を何故庇うんだ」

日実子 「あいつは人に騙されても、騙す男じゃないよ。ワルぶってるけど気は金魚の糞みたいに小さいのよ」

加古川 「ま、いい。三田村が捕まつたから、いずれ、はつきりするさ。それより、あんたを疑つて悪かつた。許してくれ」

日実子 「謝る必要はないさ。刑事つて疑うのが仕事だもんね」

加古川 「一つだけ教えてくれ。あんたが死んだ子供を1年7カ月も抱えて唄い歩き、最後にクラブの冷蔵庫に預けて三日間、姿をくらました。それが事件発覚のきっかけとなつたのだが、その三日間、何をしていたんだ？」

日実子 「もう何度も説明したじゃないか、死んだ子供を捨てるに捨てれず、今更、警察に出頭しても分かつてもらえそうにないし、どうしていいかわかんなくなつて

飲み歩いていたんだよ」

加古川 「俺には分からなかった……1年7カ月もミイラのようになつた子供を抱えて唄い続けたあんたを。しかも、そこまでやりながら正確には1年と7カ月と四日目のクリスマス夜の夜、あんたは何よりも大事なはずの宝物を冷蔵庫に預けたまま消えてしまった。何故？そんなことをしたんだ？何故？もう死んだ子供をかかえて唄い続けることに疲れたのなら、どこかに埋めてしまつても良かったはずなのに……」

日実子 「私にも分からない……分からないけど私、きつと誰かに暴いてもらいたかつたのかも知れない……私、あの子、殺してないよ。殺せるわけじゃないでしょう？殺してないけどねえ……私、度々、夢を見たの。押入の中でヒイヒイ泣いているのよね。泣き声が漏れたら又、怒鳴り込まれると思つて両手で口を押さえるんだ。＜お願いだから泣かないで……お願いだから泣かないで＞って何度も何度も頼むんだけど、あの子、泣き止んでくれない。その時、私、この子が泣き声をあげず、ミルクも飲まない人形であつてくれたらどれだけいいだろうと思つた。……あの子、本当に、眼が醒めたら冷たくなつていたんだ。だけど私、＜この子、私が殺したんだ、この子、私が殺したんだ！＞って思つた。私があの子を殺したのよあ！」

加古川 「もつしい。刑事の仕事は法を犯した者を裁きの場に引き出すことだ。人の心は誰も裁けない。俺の妻は死ぬ間際まで酒を離さなかつた。飲むと寿命を縮めると分かつているのに酒をやめなかつた。ある日、俺は妻の隠し酒を見付けた。いつもそつしたように捨てようと思つた。捨てれば又、妻が逆上して見苦しい争いになる。俺は酒を捨てるのをやめた。妻の死期を早めることになるかも知れないのに……あんたと俺の女房が重なるんだ。俺は容疑者、渡瀬日実子を追つていたんじゃない、死んだ女房を追つていたのかもしれない……」

日実子 「死んだ女房を追つていたって……どついつこと？」

加古川 「今、女房が生きていれば、俺はあの時と同じように隠し酒をそのままにしておいただろうか？たとえぶん殴つても酒を取り上げるべきじゃなかつたのか？俺はあんたの隠し酒を見つけようとしたんだ。子殺しという隠し酒をね。それを見付けた時、俺はその事実をあんたに突き付けて、罪を悔いらせるか、それとも、そつと隠し酒を元の場所に置いてくるのかを確かめたかつた。」

日実子 「ありがとう刑事さん……」

加古川 「残念ながらあんたを追う必要がなくなつたが、俺にはもう一つ刑事としてやらなければならぬことがある。この店の主人はどこに消えたのだ？何故、ここに殺人の決め手となつた蒼いガラスの水差しがあつたのだ？あのばあさんは――
体何者なんだ？」

客席後方に花屋敷響子が現われる。

花屋敷 「私をお探ですか？この店には元から蒼い水差しなんてありませんよ」

加古川 「バアさん！どこにいたんだ？ 嘘はいけない。蒼いガラスの水差しは三田村が

この店から盗もつとした所を、私が取り押さえ、証拠品として押収したんだ」
花屋敷 「ほう、それはそれは御苦勞様だこと。しかし、この店には蒼いガラスの水差しはないのだよ」

加古川 「とぼけたってだめだよ。どこから手に入れたのか教えてもらうためにここに持って……（バッグから取り出したのは赤いガラスの水差し）ど、どうなってるんだ？俺は確かに蒼いガラスの水差しを……」

花屋敷 「この店じゃね、人は様々な品物に、自分の思い出を重ねるのさ。眼にしたモノが忘れたい過去を掘り起こし、罪の色に染めてしまうのさ。すべては幻……」

死んだ我が子の呪縛から逃れられない女がいて、その女を捨てた男を殺した犯人がここで捕まる……そんな偶然をあんた信じているのかい？え？刑事さん。」

加古川 「あんたは何者なんだ？」

花屋敷 「そついうあんたこそ何者なのさ。刑事？正義の味方？法の番犬？やれやれ御苦勞様でございますこと。あんたは自分の仕事を疑ったことはないのかい？ある日、ふと、自分の生きざまに疑問をもったことはないのかい？

人様の罪を暴いた分だけ。新たな罪を生み出したかも知れないと思ったことはないのかい？

一年七カ月、死んだ我が子を抱えて唄い続けた女の、愚かだけれど、胸苦しい程の母性に心を痛めたことはないのかい？ 耳を澄ませてこらん。子供たちの泣き声が聞こえるだろう？ 優しさを忘れた大人たちの生け贄になった子供たち
ち の泣き声……ひゅるるう……ひゅるるう……と吹き荒ぶ時代の風に、ともすれば吹き消されてしまいそうな乾いた泣き声をね。」

加古川 「刑事になつて18年、数えきれない犯罪を見てきた。俺は時代という巨大な排水溝から垂れ流される汚水を、茶漉しですくい取ってるに過ぎないと思うことがある。汚水をなくそう等と自惚れるな。目の前の汚れを漉していればいい……しかし、年中、汚れた水ばかり見ているとね。きれいな水がわからなくなつてくるんだ」

花屋敷 「インドじゃね。死体と汚物にまみれた水だつて聖なるガンジスの水さ。汚れた水を茶漉しですくいとつているんだつて？馬鹿言つんじやないよ！まだ正義を
あんたが一生か 引きずるつもりかい？あんたがこだわる正義って何なんだい？
皿を一枚取り上げて（私に 言わせりゃ正義なんざ一枚の皿さ。（皿の裏を見て）古伊万里？ふん！これが 古伊万里なもんか！例え古伊万里だとしても、（落として割る）割れてしまえ ばただのカケラさ。一枚、二枚、三枚……（次々に割る）ウッフッフ……」

形のあるものは朽ち果て、命あるものは滅びるのさ。滅ぶものの悲しみを知らないで正義をやっちゃいけないよ。時代の涙から眼を背けちゃいけないよ。正義なんて落とせば割れる一枚の皿にすぎないんだからさ。」

加古川 「……犯人を追い詰めて逮捕。その手に手錠をかけた瞬間、俺は勝つたと思う。」

勝ったと思うがその後、何故か虚しい。恐怖で引きつった犯人の顔。土気色した殺人者の顔、泣き喚く人殺しの顔、俺が逮捕した犯罪者のほとんどは、俺に手錠をかけられる前から、すでに社会からはじき出され、孤独という牢獄に繋がれる囚人なんだ。」

日美子

「加古川さんって言ったよね。あんたいい人だね。私、ここに来て思ったんだ。ここにあるガラクタは私なんだって。一時は愛され、今は埃を被ってうずくまる傷だらけのガラクタたち。なんだが、この一つ一つが可愛くなってきちゃった。」

日美子、そばにあるガラクタの一つ一つを慈しむように触れながら唄い始める。

くちなしの花が咲いた朝

あなたがこの世に産まれてきたの

もみじのような手を震わせて

私に抱かれて泣いていた

何が悲しいの

お願い、泣かないで

どうして涙を浮かべるの

お願い、泣かないで

ママがいつも傍にいるから

木漏れ日さすたそがれどき

あなたがはじめて笑ってくれた

天使のようなほっぺをふくらませ

私を見つめて微笑んだ

何がおかしいの

お願い、教えてよ

何がうれしいの

おまえの笑顔を

ママが忘れずにいたいから

木の葉が舞い散る朝

あなたは永遠の眠りについた

小さな瞳はもう開かない

私に抱かれてお眠りなさい

何故、泣かないの

お願い、泣いてよ

何故、笑わないの

お願い、笑顔をみせて

いつも一緒にいたいから

もう 泣き声は聞こえない
もう 笑顔はみられない

木の葉が舞い散る朝

あなたは永遠の眠りについた

GOODBY MY BABY

SWEET HEART

私の天使 お眠りなさい

ライト、いつのまにか唄う日実子に絞られている。唄い終わって明かりが広がると花屋敷がいなくなっている。あわてる加古川。

加古川 「しまった！あのバアさんがまたもや姿をくらました！どこに消えてしまったのだ！」

加古川、花屋敷を探しまわり、店の外に飛び出す。

加古川 「私としたことがなんてへマを！あのバアさんを見逃すわけにいかない。花の首飾り館、万年露という名前の謎を聞き出さねばならぬ！日実子が死んだ我が子の首に巻いてやったローズマリーの首飾り、同じ名前が何故この店の名前になっているのか？そもそもいつ頃からいついつ店名を使ったのか？それが問題だ 花の首飾り館……な、何なんだ？これは？」

加古川、ふと看板を見上げて唖然とする。「花の首飾り館・万年露」の文字がいつのまにか「ガラクタ館・摩天楼」に変わっている。

加古川 「ガラクタ館・摩天楼？ガラクタ館？…一体、どういうことなんだあ！きつとこの看板にも何かカラクリがあるに違いない。

あのバアさんの秘密を暴いてやる！何が赤ん坊の泣き声だ！なにがひゅるるうひゅるるう！だ！私としたことが、ついついおかしな気持ちにさせられてしまった。（携帯を取り出して）ああ、私だが日向明夫殺害事件の物証である蒼いガラスの水差しを科研に持ち込みたい。…つまりだなあ、蒼いガラスが赤くなっただなあ…（バッグから蒼い水差しを出す）それが又、蒼いガラスに変わっただなあ…イヤ、そうじゃない！つまりだな、蒼いガラスの水差しがだなあ…もついいい！

突然、女が登場。

女 「はぐい、いらっしやい！豚の蚊取り線香、翡翠のイヤリング、スイス製の壊れた懐中時計、金魚の洗面器、青い眼のミルク飲み人形、ただし、これは片腕が

ないけどね。不二やのペコちゃん、サルの腰掛け、ヒビの入ったイタリアンゲラス、魂の中の忘れ物、あんたが思い出の中に捨ててきたガラクタの墓場。

……お探しいものは何ですか？」

女は舞台正面の明かりの中に入るとそれは日実子である。日実子、ゆっくりと移動してカウンターの後にある椅子に正座するとまるで置物のようにまわりにある「モノ」たちと同化してしまう。